

古代史上の津軽

新野直吉

はじめに

齊明天皇五年紀七月三日条所引「伊吉連博德書」には、周知のごとく唐帝と遣唐の使節との対話が記録されていて、国の東北に有る蝦夷国の三種の蝦夷のことが、「遠きは都加留と名づけ、次ぎは鹿蝦夷、近きは熟蝦夷と名づく」と表現されている。都加留とは「遠き、中、近き」という距離区分によることからの名称であることを思えば、アイヌ語説などの存在はそれとして、この語は「遠かる」という意味を持つのかも知れない。とにかくその津軽は、本州最北端の地域である。この北端の地津軽が、単なる僻遠の地ではない重要な意味を持つ地であることを、日頃接している古代史料に基いて明らかにし、編集部のお求に応じ意義ある記念号に参加する光栄に浴したいと思う。

一 齊明朝津軽郡

阿倍比羅夫が齊明天皇四年に津軽郡の郡領を定めたと『日本書紀』は記しているが、それは仮りに一部で考えられるように一氏の功を誇ろうとする阿倍氏の家記のような類の史料に基づく記述であつたとしても、同年紀七月四日条に

津軽郡大領馬武に大乙上、少領青森小乙下、勇建者二人に位一階を授く。別に馬武等に鮪廬二十頭、鼓二面、弓矢二具、鎧二領を賜ふ。

とあるのは、淳代郡領や都岐沙羅柵造・淳足柵造などが一緒に扱われているから、家記・氏記の類ではない官記録を出典とするものにちがいないと考えられる。

ただここで「郡領」とあるのは、既に常識化しているように「評造」とあるべく、「大領」は「評督」、「少領」は「助督」などあるべきであろう。勇建者二人というのは、令制郡司の主政・主帳に当たるとみるよりは、武官としての性格を持つ者、令制軍団の大・少毅のような性格をもつものではないかと考えられる。

このように個人の名も明記される史料の存することからして津軽郡（評）が建てられていたことは認めてよいし、その設立者が阿倍比羅夫であつたことも認めてよいと考えられる。もちろんはつきりした郡（評）域があつたのか、それが陸奥国の一部として位置づけられていたのかということになれば問題がある。むしろそれはそうではなくて、この地の族長を評造に任じたというだけのことであつたのである。したがって越の国守比羅夫嚙下の郡領（評造）ということであつたのであろう。越国津軽評という形になろう。

ところで、津軽の大領（評督）馬武の大乙上と少領（助督）青森の少乙下とは、同時に位を授けられた淳代郡大領（評督）沙尼具那の小

乙下、少領（助督）宇婆左の建武に比べ大部高いことになる。淳代は能代に当たりますが、その長官の位と津軽の次官の位とが同階であるということは、津軽が卓越した重視をうけていたことを、如実に物語っている。

この重視の由来は、国際環境下とでもいうべきところにおいて津軽の持っていた意味が、日本古代国家にとって極めて重要なものであったことによると、考える。その意味とは、日本の北の玄関口という地理的形勢によって規定づけられるものである。いうまでもなく日本は一つの列島であるが、その上に営まれる文明は、南西の方向から伝わってきたものであるというのが、従来の説である。それは通説を越えてむしろ定説となっているというべきであろう。

なるほど、朝鮮海峡を渡って北九州に上陸したり、東シナ海を渡ってシナ大陸から西九州に到達したりした文明が、日本文明の形成について極めて大きな意味を持っていたことは歴史の明らかにしている通りである。しかし日本文明が単に中国文明や朝鮮文明の垂流でない独自性を持つものであることも、日本の歴史は明白に示している。もちろん日本文明の独自性は、日本歴史が日本列島の上で展開して行く過程において自己醸成的にも形づくられてきたものであることも当然である。だが外からの刺激も、南西からの文明の流れのほかに北東からの文明の流れがあつて、それが日本文明の個性の形成に大きく作用した可能性も甚だ大きく、しかもそれは単なる可能性の問題としてではなく、厳たる現実性の問題として歴史が提示しているのである。

その提示の中で特に注目すべきことは、一つは縄文文化の存在であり、

もう一つは粛慎など北方のものに関する史料の存在である。日本の原始文化はもと縄文文化によって蔽われていて、そこに南西から新しい弥生文化が伝わり、その弥生文化が縄文文化を剥ぎ取り、新しい文化に変化させたものであるというのが、考古学の定説である。そこでは、古い縄文、新しい弥生という文化層・文化段階の変化という形で事の次第が説明される。長い人類文化の変遷を巨視的にみればその流れは確かに狩猟・採取の生産手段よりも農耕の生産手段が進んでいて新しいということになる。しかし縄文時代の末期から弥生時代の初期に移行する数世紀という短かい時間においては、両者は重なり併立して同じような重さを持った段階があつた筈である。数千年の縄文文化の生活経験は、当然縄文農耕というものを生み出した筈であつて、稲作以前すなわち弥生文化以前にも部分的な農耕を形成していたにちがいない。

そして東北北部のような寒冷の地においては、考古学上の古墳時代になつてもなお、考古学者のいう統縄文的な状態があつたのである。^②

『伊吉連博徳書』に「天子問ひて曰はく『其の国に五穀有りや』と、使人謹みて答ふ『無し。肉を食ひて存活す』と」という唐帝と使節との問答を載せ、斉明天皇四年の阿倍比羅夫と秋田地方の豪族恩荷の出会いにおいて「官軍の爲の故に弓矢を持たず。但、奴等性肉を食ふが故に持てり」と言つて、七世紀半ばになつてもなお蝦夷と呼ばれた秋田・男鹿地方の住民が肉食を主としていた事実を記録しているのは、その実情を明確に物語っている。^③

そしてこの段階になつても彼らが狩猟・採取の生活を続けていたこ

との背景には、自分達の生活形態に一つの誇り・自信を持っていたことがありと考えられる。彼らのその自信は、縄文時代の晩期に「東北の文化は水の低きに流れるように関東地方、中部地方を越えて近畿地方まで伝播していった」「東北はいつも西南日本の文化を受け入れる後進地帯であった。ところが縄文時代の晩期には東北は先進地でその文化が西南に流れて、関西の文化にまで影響をおよぼした。」といわれるような、亀ヶ岡式土器の作られた時期の文化の高さについての自信に由来していると考えられる。考古学において、各地でそれを模倣した土器の存在を確認しているような精巧・華麗のすぐれた土器が東北特有のものであることは、早くから知られているが、もっと突きつめていえば、亀ヶ岡式土器は津軽を発生之地とするものであろう。この高度の縄文晩期の文化がここに発した理由も考えてみなければならぬ。もちろん津軽それ自体の優秀性から自然発生的に生み出されたという説明が、津軽の人々には最も快く迎え入れられるであろう。

だが、広い東北の天地の中で亀ヶ岡式文化がまず津軽に生まれたとすれば、そこに特殊の性格が秘められていたとみるのが自然である。そしてその津軽の特性というものは、すでに指摘した北方の玄関としての港津の性格であると考えられる。この性格は津軽に他の地方にはない外来文化の刺激を与えたものと認められる。土器に表われた技法そのものが外来であるか否かということとは別に、この刺激は総体としての津軽文化の向上に大きく作用したと考えられる。その特性は古代になっても伝わっていたのであるから、斉明朝になっても津軽の人々は水田農耕を伴わない北方の人々と絶間ない交渉を保っていた筈で

ある。この交渉の間において、いつもこの生活と生活環境とが更新されてきていたという事実があったのであろうことも推察に難くない。

遣唐使の言う「五穀無し」の全面否定は、都人士である官人の認識に基づく発言であるが、思荷の実地における発言は、そのまま比羅夫軍も認めたのであるから、虚偽の申立てではなかった。となると、考古学的には三世紀に既に稲作のあった明徴のある八郎潟の湖畔地帯に接し、大まかにいえばそれも含むような勢力圏を持つ思荷が、三世紀からは数百年たっているのに、なおほとんど水稻栽培を伴わない生活をしていくことになるわけである。しかもそれは、いうまでもなく農耕技術を知らなかったからではない。結局彼らは狩猟の方が好きで、稲作よりもそちらを選択していたということにすぎないのである。^⑤このような事情は、後背地が田舎館遺跡などを含む津軽平野となっている津軽沿岸部の豪族たる馬武たちにおいても、同じであったと考えられる。

津軽の馬武の領域の港は間違いない十三湊であったとみられるが、彼が、淳代の沙尼具那の小乙下、秋田の恩荷の小乙上を上まわる大乙上の位を与えられたということは、彼がこれら地方豪族の中でも卓越した評価を受けていたことを示し、それは、馬武が沙尼具那や恩荷とは違ったものを持っていたことによると考えられる。そしてその最もはっきりした違いは、彼が本州で一番北の郡領（評造）に擬せられる豪族であるということである。その彼の特質が、くり返し強調してきた北の玄関口を擁するという彼の役割を導き出すものである。比羅夫も朝廷も馬武管下の湊を通して輸入されるものに高い評価を与えたわ

けであろう。それは単に馬武一代の個人的力量の評価ではなく、先にみた亀ヶ岡式文化以来の歴史的伝統に対する評価なのである。それ故に比羅夫北航以前の斉明天皇の元（六五五）年にも「津刈の蝦夷六人に冠各二階を授く」という「日本書紀」の記述があるのである。津刈を津軽とは別の処だなどという必要は全くないであろう。そのような疑問は「刈」の一字にこだわる形をとりながら、実は比羅夫のこときえ夢物語的なものに、ましてやそれ以前において、津軽のような北辺の田舎者が冠位を受けるなどということによって日本の歴史に登場する筈がない、という先入観に導かれている考え方だからである。

こうした要地に、比羅夫の北航を契機として、当時の地方制度である郡（評）が設定されたことは決しておかしくないことではない。令制形成期の国家にとっても地方を把握するのは国郡の制度であった。津軽のような要衝を掌握するために最もふさわしいのは、その地方の豪族を国家に直結させ、彼が族長として持つ地域における安定支配力を最大限に活用することである。東北北部について陸上内部からひた押し支配が確立してはいなかったこの段階で、津軽や淳代・秋田の族長を郡領（評造）とするということは、氏姓時代の初期に於いて地域の小君長を県主としたような既存勢力の承認掌握よりは進んだ形であったろうが、その次の歴史段階に地方の君長たちなどを国造に任じて地方官人に位置づけ、その持てる勢力を統制活用して国家の地方支配力たらしめたのと殆んど同じことである。そのうえ接触者が越国守という郡（評）の長に対しては直ぐ上の直属上官なのであるから、国家機関が津軽の族長を制度的に掌握する手段としては、最も現実的なもの比羅夫の「北航」と本稿の記すところを一般には「北征」とか「蝦

註

（1）「宇婆左建武」を人名とする有名な説（田名網宏「古代蝦夷とアイヌ」）Ⅱ古代史談話会「蝦夷」所収、大林太郎「日本語起源論と民族学からの希望」Ⅱ「言語」昭和四十九年二月号など）があるが、建武は立身と同じで、別に「位一階」と表記されるものと同意である。

（2）「古代東北の開拓」（塙書房）などで強調してきた私のいわゆる「斑状文化論」とは、このような統縄文的遺制の生産文化と稲作文化とが、主として東北北部で、混在併存していたという考えである。この問題については、菊池徹夫「蝦夷論の系譜」（「史観」一〇一冊）に詳しい。

（3）この辺については「七世紀後半の西奥羽情勢」（「北奥古代文化」一）で論じたことがある。

（4）伊東信雄「亀ヶ岡式文化」（学生社「古代東北発掘」所収）。

（5）彼らが稲作を選択しなかったことについては「山夷と田夷」（日本古代文化の探究「蝦夷」Ⅱ社会思想社）の中で所見を述べておいた。

二、養老津軽津司

斉明朝の津軽関係史料が根拠の乏しいものでもなく、一時的な騒ぎでもなく、阿倍氏だけのものでもないことを知る史料に、養老四（七二〇）年紀正月二十三日条の「渡嶋津軽津司從七位上諸君鞍男ら六人を蘇我國に遣はし其の風俗を觀せしむ」というのがある。「青森県の屯聚していた蝦夷の代表として救援を求めてきた二人に肅慎のいる

歴史』は、①靺鞨国は沿海州とも考えられているが、斉明紀の肅慎と同様に中央からみてさらに奥地の意であろう。②津司は港付近を支配していた蝦夷の族長とみられ、朝廷に帰順した蝦夷であろう。と位置づけられたが、従来の考えを纏めたものとしてはまさに妥当な論であった。しかし、今の段階からは、尚言うべきこともあるので、それを加えてこの史料について考察してみたい。

渡嶋津輕津司といわれているので、この官司は、津輕海峡を越えて北に向かう対外交渉の場となる港津の管理に当たっていたという性格のものであろう。当然北海道の奥地から樺太・沿海州方面が対応すべき方面であつたと考えられる。靺鞨をこの時に視察の対象としていることがそれを裏書きしている。その靺鞨は架空ではもちろんない。また古代中国史でいうものと同一でなければならぬというものではないから、北方の狩獵・漁撈民族であればよいのであるが、只漠然とした北の奥地ということではなく、何か肅慎とはちがう実体を持つものとして古代日本と接触を保っていた人々であろう。さらにこの靺鞨は、近時またその文面が注目されてきている「多賀城碑」の文面にもみえ、しかも多賀城の位置を示すためにどうしても欠くことのできない北の国名として記載されていることを思うと、単に漂泊している部族集団などを意識していたのではない。明白に国土を意識してここでも「靺鞨国」といっているのであろう。つぎにみる肅慎との関係からして沿海州でも北部の方の樺太島対岸部あたりを指すものと認められる。鞍男はさきわめて大和的な名であるが、斉明天皇四年の馬武や青蒜から六〇年もたっているので、あり得ない変化ではない。もし現地の豪

族であるとすれば、和銅三(七一〇)年に「陸奥の蝦夷ら君姓を賜ひ編戸に同ぜんと請ふは、許す」とあるのに当たたる受姓者の一人であるが、帯びているのが従七位上という相当の位階であるうえ、まだあまり一般化していなかったらしいとはいへ外位を帯びているわけでもないことをみると、派遣されてきていた赴任官人であるとみること一案である。そして「司」をそのまま令制官司にひき当てて解し、従七位上に注目すると、鞍男は実質次官兼帯の判官という役どころであつたかもしれない。

靺鞨とともに肅慎もこの津司と関係の深い相手であつたと考えられる。これもまた古代中国にいう古典的肅慎と同じものでなければならぬわけではない。しかしこれも古く考えられてきたように空漠たる北方民族の意ではなく、やはり一つの実体を持つ北方民族を意味していたものである。肅慎を北海道の古代アイヌと考える説もあるが、それは蝦夷というものが東北に住む日本の政治にまつろわぬ辺民であると規定することと相關関係があつて、蝦夷が古代日本民族なら、蝦夷とは違ひその奥に住むのは古代北海道アイヌに当たるといふ判断が導き出されたのである。そして蝦夷辺民論は現在なお有力である。しかし蝦夷の中に古代アイヌが含まれてはいないという実証が判わらない以上、全面的に承認できる説ではない。ことに蝦夷には、「陸奥蝦夷」「出羽蝦夷」「津輕蝦夷」などという東北地方在住者を示すものと、「渡嶋蝦夷」という北海道島に住む人であることを示すものとが含まれているのであるから、肅慎は渡嶋蝦夷よりもさらに一段遠方の北の人々であると考えべきである。

遠く欽明紀にも肅慎の名は見えるが、集地的には斉明朝から飛鳥淨御原朝にかけてあらわれる。養老に近いところから関係史料を辿ると、持統天皇十（六九六）年紀三月十二日条に、肅慎志良守叡草がもう一人の蝦夷とともに衣服・純・斧などを賜ったとあり、また天武天皇五（六七六）年紀十一月条に肅慎人七人が新羅の使者全清平らに従って采朝したことがみえる。これは肅慎の求めるものが繊維と鉄利器であったことを示す史料であるが、それと共に肅慎の人々が統一完成期の新羅使者に同行したことは、その国土が朝鮮半島に近く、鉄錫に対していえば沿海州の南部の方に当たることを示すものといえよう。そして次に斉明天皇六（六六〇）年紀五月是月条の、阿倍引田臣（比羅夫）が夷五〇を献じた時に、肅慎四七人に饗応したという史料になる。この年渡嶋で比羅夫が肅慎と激戦したことが三月紀にみえるから、この饗応はその善後策なのであろう。

斉明天皇五年紀三月是月条に、阿倍引田臣比羅夫が肅慎と戦って帰る、捕虜四九人を献じたという或本の説を引用しているが、この四九人は、六年紀に饗応されたとして出ている四七人と数が近く、七と九とは文字としても誤混伝写の可能性がある。おそらく同一のことをいうのであろう。さらに、『日本書紀』にはその記述はないが、案外四年にも肅慎との接触はあったのかもしれない。結局比羅夫の活動が肅慎との交渉について一つの中間契機となる節目を作ったものであるといつてよい。津輕津司の肅慎交渉の任務というものを想定するとき、比羅夫の北航はこの「司」設置のための礎石を据えたものであるといえる。

比羅夫の「北航」と本稿の記すところを一般には「北征」とか「蝦

夷征伐」とかと位置づけてきた。それは既に『日本書紀』自体の編者たちが「阿倍臣、船師一百八十艘を率ゐて蝦夷を伐つ」と定義していたところでもある。だが実は、彼と肅慎との交渉は単なる武力衝突ではなかったのである。すなわち六年紀三月条が冒頭から二〇〇艘の水軍で肅慎を伐ったというのも結果論的視点からの文章化であると認められる。水軍は陸奥の蝦夷を水先案内として北進した。肅慎も南下して津輕にきていたわけであるが、津輕の蝦夷も北上して彼等と交渉を持っていたものと考えられる。そして文意に忠実に理解すれば、比羅夫やそれと同様な中央から北に赴いた人々は、直接肅慎の勢力圏に向くようなことはあまりなかったらしいということになる。

そういうことになれば、この組織的な勢力による直接交渉を肅慎に対して持った比羅夫水軍は、画期的な意味を持つ役割を果たしたことになる。彼らがある大河の側に至ると、河口の海岸に渡嶋の蝦夷一〇〇〇余が聚っていたのに出会う。これは「何処の大河」という特定がないので形式論としては岩木川でもアムール川でもよいが、蝦夷が渡嶋の人々であるから渡嶋の大河ということになる。そしてその渡嶋は、津輕から渡海して行ったところということになる。北海道島を渡嶋とみることの妥当性はここでも自然に認められてくる。彼らは多数の肅慎船軍の采襲によって避難し屯営していたもので、比羅夫軍の保護下に入りたいと願ひ出てきた。比羅夫はこの願ひを受け入れたが、決して肅慎と武闘を演じようとはしなかったのである。彼がここで行おうとしたのは交易であった。

屯聚していた蝦夷の代表として救援を求めてきた二人に肅慎のいる

場所を聞き、その船が二〇余艘であることを聞くと、比羅夫はすぐ使を派遣して肅慎人を喚んだ。けれども彼らは来なかった。そこで比羅夫は次の手をうつのである。それは『日本書紀』の説明では彼らの貪嗜の心をそそるためにしたということになっているが、実際は全くの商行爲である。まず綵帛・兵器・鉄などを海辺に積んだのであるが、これは商品の提示である。これに対し肅慎は軍船を連ね羽を木に繋ぎかかげて旗にして近づいてきた。これも「旗」にしたとあるので、軍の印としての旗・指し物にしたようにとれるが、肅慎側の商品提示であったとも考えられる。何故ならば鳥羽は麁皮以下の毛皮・皮革、それに多分黄金などと共に北方からもたらされる重要な交易品であったからである。

だから肅慎船の一艘から降りた老人二人は全くの品定め動きをみせた。積んであったこちらの品物をよく観察して一重の衣服に着喚え、各人布一端を提げて船に帰ったのである。すなわち商談は成立したやにみえたのである。だがしばらくして戻ってきた老人は、先に着喚えた一重衣服を脱いでもとに返し、布を置いて船に引き揚げてしまったのである。結局、老人たちの経験豊かな判断では交易を成立させるのが妥当ということであったと認められるが、船に帰ると岩手などの強硬派や、利益追求第一派が、強力な武装商戦隊を相手にした取引に抵抗を感じたり、不満を持ったりしたことによって、商談は不成立に終わったものであろう。

だからここで、歴史学の常道にさからって「イフ」を持ち出していえば、もし交易が成立していれば古来よく知られている幣路弁島の激

戦などは起こらなかつたであらう。東北の日本海岸に多い能登（屋谷）衆の大先達の能登臣馬身竜が部隊長の身で戦死したり、今に越後・越中・越前・今立・若狭などを名乗るような人々の先輩が、北海の島陰で死んだり傷ついたりしなくても済んだかもしれない。平和的な交易こそ、比羅夫北航の目的の重要な一部を構成していたのであり、それゆえにこそ、北方との交易で相手に渡されていた絹織物や麻布・鉄製兵（利）器なども用意していたのである。比羅夫北航という史実が、渡嶋津輕津司の対北方交易機関としての機構や機能の成立に関して、大きな意味を持っているとする論が、的外れでないことが理解されるであらう。

註（１）宮崎道生『青森県の歴史』（山川出版社県史シリーズ）。

（２）『続日本紀』和銅三年四月二十日条。

（３）高橋富雄『蝦夷』（吉川弘文館）がこの説を確立したといえる。

（４）『日本書紀』斉明天皇四年四月条。

（５）比羅夫水軍北航には、百済問題の切迫という国際環境の中で、日本の代表的水軍の演習の目的もあったことは『古代東北史の人々』（吉川弘文館）などにいたるまでの数著で度々指摘してきた。

三、平安時代の地力

その後正規な令制都として整えられる機会がなかったにもかかわらず、津輕は日本古代国家にとっていつも重大な関心の対象となる存在

であった。そのような存在であった理由は津軽の地力の「強大」であることにある。だから度々史上に登場するわけではないにもかかわらず、登場するたびに歴史の重要局面に位置しているのである。奈良時代には渤海の来航^①などに関係して津軽の地は当然役割を負ったと考えられるが特に史料は伝わらない。

しかし、平安時代初め弘仁二（八一）年に、文室綿麻呂が自己の征夷の功績を「宝龜五年以来三十八歳^②」の戦乱を終結させたと誇り、朝廷もそれを認め、また世間もこの征夷を坂上田村麻呂征夷とならび位置づけてきたあの東北経略が終って、国家の東北経略線が最大限に拡大安定したとみられる段階になると、津軽はつぎのような形で注目されるのである。

すなわち弘仁五（八二）年十一月十七日条に「胆沢・徳丹二城、遠く国府を去り、塞表に弧居す。城下及び津軽の狄俘、野心測り難し。非常に至るに備へざるべからず。伏して望むらくは予め糒塩を備へ、両城に収め置かん」という陸奥国の言上がある。最大限の安定を確立した筈の段階に、在鎮守府の胆沢城と、最北の城徳丹城との城下の民の動静を案ずる際に、そのうしろの閉伊・貳薩体や都母の勢力を越えて、遠く「津軽の狄俘」というものが陸奥国司にとって最大の心配な相手であったということは、不思議といえは不思議なことである。

しかしこれもよく考えれば、今の岩手県の北部貳薩体の村夷（田夷）勢力の代表者伊加古が、陸奥・出羽両国連合軍の圧力をうけながら「兵を練り、衆を整へ^③」ていたところが、青森県の坪川などに遺名をみるという「都母村」であったのであるから、何の不思議もないことであった。

というのは、後世の岩手県北部から青森県八戸南部地方にかけての勢力が、その背後に連なっており、古くから中央に通交を持っていた津軽と、無縁であったり対立関係にあったりしては、とても政府軍に対抗して軍事行動を続けることなどはできなかっただろうからである。

弘仁二年の段階では、直接にも間接にも津軽と綿麻呂軍とが関わりを持った史料は伝わらないが、歴史の大勢からいえば、当然背後の大勢力津軽の理解があつて、腹背に敵という憂はない状態であつたものと解さざるを得ない。

むしろ何かしら津軽からの支援さえあつたと考えの方が自然である。それは公然の秘密というか、当然の常識というかの性格を持つもので、陸奥・出羽両国当局も、現地勢も事の実態を認識していたものであろう。だからこそ陸奥国当局は、弘仁五年になつても、抵抗勢力の背後の隠然たる大勢力津軽の存在について、このような懸念を示したのである。言上の中にある「津軽狄俘」という四字の語句は、宝龜以降延暦・弘仁に至るいわゆる大征夷期において、津軽がどのような意味を持って日本古代史上に位置したかを雄弁に物語る史料として、正に千鈞の重みを持っている。

これ以後も津軽のその隠然たる勢力が持続されたことは、六五年ほど経った元慶の乱の際に証明される。それは元慶二（八七八）年のことである。すなわち「日本三代実録」同年七月十日条に

津軽の地の夷狄、或は同ずるか、或は同ぜざるか。若し同ぜざれば、上野国軍を以て將に討滅するを得べし。遂に同ずれば、大兵と雖も輒くは制す可きこと難し。上野・下野・陸奥三国の軍士忽じて四千

人、其れ陸奥軍先に既に亡帰す。上野軍且に來らんとし、六百余人の下野軍塚首に入ると雖も、まだ強弱を知らず。津輕の夷俘は其党種多く、幾千人たるを知らず。天性勇壯にして常に習戦を事とす。

若し逆賊を速かば、其の鋒当たり難からん。……津輕の夷虜、

天性鹿獐なり。若し凶類に速かば夷に制し難しと為す。塞下流言

南北異口、或は云ふ「既に同ず」、或は云ふ「未だ同せず」と。

という記述が出てくる。

これは、三月に秋田城の支配下にある秋田河（雄物川）以北の郡郷制下俘囚と、さらにその北に連なる朝貢的服属をしていた現地勢力とが、一二村一致して城司の苛政に対し叛乱を起こして、秋田城を攻め落としたうえ、秋田河以北の独立を要求した大戦乱の展開過程において問題にされた津輕の評価である。おそらく平安時代において出羽では最大の危機であったともいべき元慶俘囚の大乱に際して、津輕が乱の行方を決定づけるものとして、注目を受けていたのである。しかもこの乱に直接関係している北限は上津野（鹿角）・火内（比内）・野代（能代）であって、津輕は乱の表面には全く関係がなく、実際の戦局にも名を現わしていないのである。それにもかかわらずこのように重視されていたとは、一見信じ難いほどである。

だがこれは、朝廷・国衙にとってもそしておそらく乱を起こした俘囚らにとっても、極めて鮮明な現実であったのである。ここで思い合わされるのは弘仁五年の件である。乱の表面には出なくともいつも津輕はその大きな地力に対する注視と評価をうけていたのである。この乱においても同様であって、野代（能代）・比内（大館）などが背後

の津輕をたのんで行動していた様子が窺えるのである。さらにいえば津輕が、物議をかもしていた「同」「不同」について後者を選んだことが、この乱を終熄に導いたということになるのである。北辺にありながらも津輕の占めていた地位は少しも下落していなかったのである。

このような津輕であったからこそ、前九年ノ役後に安倍氏の子孫が逃れて安東氏の基いを開いたと伝えられ、それが妥当であると考えられるようになるのであり、平泉滅亡の際に、悲劇の義経が高館で討死せずに津輕から北に渡ったという説話が、まことしやかに生まれ伝えられることになるのであり、泰衡自身もこの方向を目指して肥（比）内まで逃れ、河田次郎に殺されるのである。もちろん『吾妻鏡』^①では糠部郡を目指していたとなっているが、肥内に入っているのは、峠越であろうと能代港経由であろうと、糠部ではなく津輕を目指しているというのが実際であったとみられる。これらは、奥州の頂点に高く位置していたような勢力にとって、十一世紀半ばにも十二世紀末にも津輕は一つの希求すべき土地であったことを示している。同時に東北地方の民衆にとってもまた、おそらく或る種の憧憬をいだかせる土地であったことを暗示しているのである。多分それはあの亀ヶ岡式文化の東北全体に普及して行った時以来の歴史体験に基く、長い伝統を持つ潜在・顕在の意識でもあったのであろう。平泉藤原氏は肅慎や挹婁の采貢を謳っているが、^②このような場合にも、彼らの采航する主な港は津輕であったと考えられる。

註（１）津輕のことはないが、宝龜二年紀六月二十七日条には「出羽国賊地野代湊」に來着したことが史料として伝わるから、推

察することができる。

(2) 弘仁二年紀閏十二月十一日条の文室綿麻呂奏言。

(3) 弘仁二年紀七月二十九日条。

(4) 文治五年九月三日条。

(5) 中尊寺供養願文。

おわりに

古代における津輕の価値は、中世にも引継がれる。それは古代以来の地力と要衝性を高く評価した鎌倉幕府による津輕重視として表われる。まず当初宇佐美実政を配したほか、曾我・工藤などの御家人も配し、安東氏も登庸するのであり、また多くの北条得宗領を設定するのである。

しかもその安東氏は極東北の雄であることを誇示する日ノ本將軍を称しながら北条氏の内人でもあり、得宗領の管理者でもあるのである。この氏が日本海海運を通じ、広く西国まで力を及ぼしたのも北条氏との関係があればこそであろうし、建武中興の際に秋田城に拠った北条氏余党の存在の背景にも北条氏の威を背に負った安東氏が、秋田地方の主として沿海部において、既に鎌倉時代から大きな地歩を占めてきていた事実があった。その地力は幕府北条氏にのみ評価されていたわけではない。永享八(一四三六)年安東康季が若狭国小浜港の羽賀寺を修造することとなるように、京都からも重視されていたのである。

安東氏の任は「蝦夷管領」でもあった。このことは、中世になっても津輕が単に鎌倉や京都にだけ面を向けるようになったというわけではないことも物語っている。原史料に接することが不可能なのが遺憾

ではあるが、『市浦村史資料編中巻』によれば「東日流外三郡誌」所収「安倍一族遠征録」に、貞応元年安東船が肅慎国に向かい五月七日着陸し多くの馬を積んで采潮したというのがある。

船頭は安倍三郎恒秀以下で、此の国の民は敵意なく、語らなく(言葉は通じなく)ても心意相通じ、民は馬乗に達していて、大荒野を巡ること速く、名馬が多い。これを太刀と交換し、一七頭と馬糧を積んで八月十六日に十三浦に帰潮した。帰化人の理長志貴を案内に伴ったという。これなどは固有名詞の確からしさなどからしても、それなりの拠るべき処のある史料と考えられる。他にも樺太に当たると認められる流鬼国から、靺鞨国・韓国・唐国などの交易交流のことが伝えられる。これらによれば、安東氏の目や行動が海外に向いていたことは明白である。これは津輕に生きてきた安東氏とその一党が、中世になっても古代以来の津輕の伝統の中に生きていたことを如実に物語っている。

(秋田大学教授)